

## 新潟市内野の伝承音楽における中立音程

森 下 修 次

### I はじめに

中立音程とは西アジアに顕著とされる短音程より広く長音程より狭い、長音程と短音程の間に位置する音程を示すことば<sup>(1)</sup>である。半音より狭い音程である四分音もこの中に含まれる。日本では学校教育をはじめポピュラー音楽なども12音律が基になっている。12音律は最小単位が半音なので、半音のさらに半分の音程である四分音は現代曲を除いてほとんど意識されることがない。しかしながら世界や日本の伝統音楽ではそういった半音よりあきらかに狭い音程が使われてきた。

例えば西アジアの音楽以外でも、北米で発達したJazzでは長3度と短3度の間の音程をピアノで表現するために和音の長3度音と短3度音を同時に弾くBlue noteといわれる音が知られている<sup>(2)</sup>。南アジア、東南アジアではインド音楽やインドネシアのガムラン音楽などが12音律とは明らかに異なる音律、独特に響きを持っていることが知られている。では、日本音楽ではどうか。

日本の伝統音楽は雅楽の音楽理論が基調になっていると思われる。雅楽の音楽理論は、1オクターブを12の音で構成することを導き出した三分損益法を基にした中国の音楽理論が基になっていると思われる。三分損益法は西洋のピタゴラス音律を共通点が多いといわれており、ピタゴラス音律と同じ12音律である。また、実際の音楽の構成音となる音階の構造は西洋音楽と雅楽の音楽理論で構造的部分を含んで共通点が多い。そのため後世の日本音楽に一番影響を与えたといわれる仏教音楽＝声明も現存する理論書を見る限り雅楽の音楽理論を用いたものが多い。声明では雅楽の音階の理論を基にしながらも「ユリ」「スグ」といった用語で表される声明独特の表現法を確立し、それが様々な日本の古典音楽に

影響を与えていると考えられている。

そのことと直接的関係があるかどうかは定かでないが、兼常は日本民謡に関する研究で「ほとんどあらゆる周波数の音が連続して奏されるという点は、これが日本民謡に特有の現象なのか、そもそも世界の声楽につきものの現象か…」と中立音程の多さを指摘している<sup>(3)</sup>。また、大塚は三味線において、「商」や「羽」といった音で1音程度の範囲のうちで任意の音高になるという現象について「臨機音高組織」ということばで説明しようとしている<sup>(4)</sup>。これも中立音程の一種であると考えられる。

このように中立音程、すなわち四分音や微分音の存在がすでに述べられており、我々の身近な日本音楽にも存在することが示唆されていた。しかし、音高はあくまで12音律による考え方があくまで中心であり、インドや中近東の音楽のように1オクターブを12より多い数で成している音律という概念ではなかった。

現代の学校音楽教育では12音律(平均律、純正律、ピタゴラス律)がよく、それ以外の音律で歌うと「音痴」とされかねない状況であることは否めない。しかも、日本における音響学的あるいは知覚認知的音律の研究は12音律を除いてはなほだ不十分な状況と言わざるを得ない。もし、12音律以外の「伝統的音律」をもった児童生徒が音楽の授業のなかで、12音律に適合できず「伝統的音律」で歌唱すれば、その児童生徒は文化的正当性を評価されないばかりか「音痴」の烙印を押されてしまい、音楽的自尊心を喪失してしまうだろう。ただ、幸いなことに、この1、2年は学習指導要領の改訂により、日本の伝統的歌唱法や器楽が重要視され、現場の授業に反映されつつあり、その点は良い方向に向かっていると評価できよう。

日本における音響学的あるいは知覚認知的音律の研究においては、マスメディアの発達により地域の

中で確実な伝統的音律感をもった人が見いだせにくくなってきたことから、測定機器の発達してきたにも関わらず研究が難しくなってきたと思われる。しかしながら、幸いなことに、大学の地元、内野の祭礼音楽を調査するうち、偶然見いだせたのが次に述べる音楽であった。

## II 新潟市内野地区の伝統音楽

新潟市内野地区は新潟市の西方にあたり、新潟大学五十嵐地区の地元でもある。新潟県内の地域の伝統音楽は実はかなり盛んである。かつて各地で活動していた瞽女も新潟が最後であった。各地区はそれぞれの特色をもって、今でも祭りや儀式的中心的役割を担う形で伝統音楽を保持している。新潟市内野地区では毎年春と秋の2回内野祭を催しているが、特に大規模な行事になる秋の大祭は毎年9月14～15日に行われる。祭の準備などは9月に入ると各町内で行われる。13日夕刻には内野四つ角付近に交通規制を行い、民謡流しが始まる。民謡流しでは内野小唄、新潟甚句、佐渡おけさが演奏される。14日15日は祭りの中心行事として山車が内野四つ角を中心とした各町内を練り歩く。山車は先太鼓に先導される。山車の中では町内各にそれぞれ異なった音楽が演奏されるが、三味線まで乗せた山車は現在では七番町（稲荷町）のみである。そのときの様子を写真1に示す。



写真1 内野七番町の山車（2001年9月15日）

私は2001年より内野祭の音楽について共同で調査している<sup>(5)(6)</sup>が、ここ七番町の山車で演奏される三味線音楽に西洋音楽とは明らかに異なる音程を見いだせた。それについて以下に述べる。

## III 測定方法と結果

七番町の山車はトラックに荷台を利用したもので、演者として三味線3～5名、篠笛1～2名、太鼓1名が乗車し、演奏する。最近では若い学生が演者として乗ることも多くなった。測定には祭の時、地元で三味線を演奏されている70歳台の女性の方1名をお願いして、練習時に単独で録音させてもらった。また、地元の方の演奏と比較するために、プロの三味線奏者（長唄）の方にも収録を依頼した。なお、プロの奏者には通常の演奏の他、かつてしばしば演奏されていたというピッチを記憶を頼りに再現してもらった演奏の、合計2種類の奏法の演奏してもらった。演奏曲目は「数え歌」である。

収録音はコンピュータを用いた。NTTアドバンステクノロジー社「音声工房」で周波数分析し、得られた周波数をセントに変換した。図1はその結果である。なお、図1凡例の「プロ」とは通常演奏のことを示し「プロ（変）」とは再現していただいた弾き方を示す。「地元」は地元の方に演奏していただいたものである。

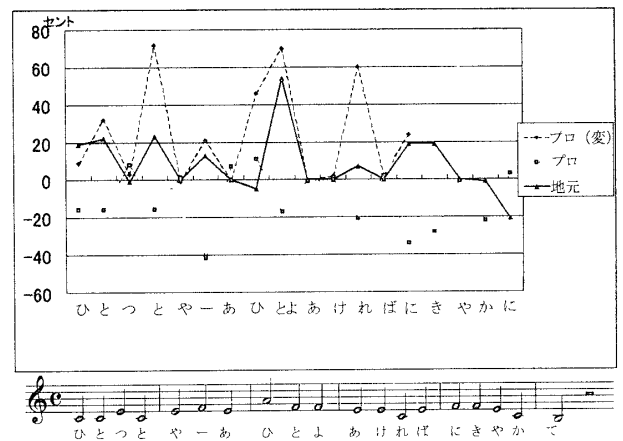


図1 3つの演奏の pitch と平均律の差の比較  
（3の弦，開放弦を±0セントとする）

また、セントの値を元に相関係数を求めた。結果は表1ようになった。

「プロ」-「プロ（変）」が-0.38、「プロ」-「地元」が-0.57、「プロ（変）」-「地元」0.63で、「プロ（変）」-「地元」の相関が比較的高いといえる。このことから地元の方の演奏する三味線のピッチは古い形を残している可能性があることが示唆される。

表1 三種の演奏の相関係数

奏者	地元	
プロ	-0.57	プロ
プロ(変)	0.63	-0.38

「地元」の演奏は主音であるC音を0セントに考えると「ひとつとやーあ」の下線部分が3度音程であるが、相対的に平均律より低めの音程である。すなわち、C音とE音は長3度であるが20セント分だけ低くなっており短3度音程に近づいている。

「プロ(通常)」の演奏はちょうど「地元」と反対の形になっている。すなわちE音を高めに演奏することにより、次のF音との音程感がなめらかになるよう音程がとられていると考えられる。そのことは次のF音が40セントも低めに演奏されていることから示唆される。このF音は長2度下がってE音に移行することもF音が40セント低い理由だと思われる。こういった「プロ(通常)」の演奏は、西洋音楽、特にプロの演奏ではしばしば見られる形態である。

あとの部分も「地元」は「プロ(通常)」とかなりの部分で相反している。反面、古い時代の記憶を元に再現してもらった「プロ(変)」の演奏とは変化の方向が同じところが多い。ただし、「プロ(変)」ほど変化は極端ではない。

このことから、現在とは違った音程感の音楽が存在し、現在もそれが新潟市内野に残っていたと考えられる。

#### IV 心理実験と結果

上記2で得られたデータを元にMIDIデータを作成し、音源を用いて刺激として提示した。音源はローランド社SC-88proで音色はShamisenを使用した。提示刺激は実測値から作成した3つに、12平

均律で作成したものを加えた4つの刺激とした。提示順序はランダムであった。被験者にはラウドスピーカーを用い、被験者の聴きやすい音量で提示した。被験者には、三味線音楽としての音程により相応しいものを選ぶように指示をした。被験者は3名なので統計処理は行わなかった。表2に結果を示す。

被験者が3名と少ないので断定はできないが、合唱コンクールなどでよく用いられる審査集計方式のひとつである新增沢方式によりまとめると表2の最下欄のような結果になる。これによると「地元演奏者の音程」が一番指示されたといえる。「地元演奏者の音程」が被験者A、Cで1位、Bで2位であったことから3名の被験者は三味線音程として「地元演奏者」をよいと感じていると考えられる。他方「プロ(変)の演奏」は、演奏者自身好ましくないと感じている音程なので下位に位置するのはもっともだと思われるが、普段聴き慣れているはずの「平均律」も評価が分かれる。

これらの結果から若い学生の被験者と老年の地元三味線演奏者との間には、年代が異なっても共通する音程感をもっている可能性があることが示唆された。

#### V まとめ

これらの測定および実験により、内野の伝統音楽にまだ、古い時代の音程感が残っていたことが見いだされた。しかも、現代の大学生にもまだその感覚が残っている可能性も示唆された。ただ、今回は測定や実験の数が少なく、こうだと言いつけるだけの証拠はそろっていない。しかしながら、今回見いだされた現象は新潟市内野にのみ存在するのではなく、日本全体に存在すると予想している。更に多くの調査と実験を続け、日本人の音程感を明らかにしていきたい。

表2 3名の被験者(音楽専修学生)の三味線音楽にふさわしいと思われる音程判断の結果

被験者	ふさわしい←順序結果→ふさわしくない			
A(三味線経験有)	地元	平均律	プロ	プロ(変)
B	プロ	地元	プロ(変)	平均律
C	地元	プロ	平均律	プロ(変)
結果	地元	プロ	平均律	プロ(変)

**謝 辞**

プロの奏者、および地元の方々にはたいへんお世話になりました。お礼申し上げます。

**文 献**

- (1) 片桐功 (1989) 「日本・アジア音楽の音律論」 岩波講座 日本の音楽・アジアの音楽 7 岩波書店 pp. 92-101
- (2) L. Bernstein (1959) *The Joy of Music*, Simon and Schuster (日本語版 吉田秀和訳「音楽のよろこび」1966) pp. 94-97 (日本語版)
- (3) 柴田南雄 (1978) 音楽の骸骨のはなしー日本民謡と12音音楽の理論ー 音楽之友社 pp. 59-62
- (4) 大塚拜子 (1995) 三味線音楽の音高理論 音楽之友社 pp. 122-123
- (5) 伊野義博, 松浦良治, 森下修次 (2002) 「祭囃子の教材化試案ー内野先太鼓の事例からー」 新潟大学教育人間科学部附属教育実践総合センター「教育実践総合研究」創刊号 pp. 31-46
- (6) 森下修次, 松浦良治 (2003) 「内野町における盆踊りの復活の試み」新潟大学教育人間科学部紀要 第5巻第2号 pp. 189-195